大学生の他世代に対するイメージ

高齢者イメージと大学生イメージの比較

○久世淳子¹・奥村由美子²

(¹日本福祉大学健康科学部・²帝塚山大学心理学部)

キーワード: 大学生, イメージ, 他世代

University students' image of other generations

Junko KUZE¹ and Yumiko OKUMURA²

(¹Nihon Fukushi Univ., ²Tezukayama Univ.)

Key Words: university students, image, other generations

目 的

高齢社会では、私たちが高齢者と接する機会は増えていく。異なる年齢の人々に対するイメージは私たちの行動に影響をあたえ、行動の結果によって新しいイメージが形成される。異なる年齢の人々に対するイメージを検討することは重要で、久世 (1997) は「おとなでもなく、こどもでもない」といわれる青年 (大学生) の他世代に対するイメージを測定し、小学生までの他世代との経験がその世代に対するイメージに影響していることを見出している。しかしながら、青年自身のイメージは測定しておらず、同世代、さらには自分自身のイメージの位置づけについても検討する必要があると考えられる。そこで、本研究では大学生を対象とし、「大学生」と「高齢者」に対するイメージの構成要素を比較する。

方 法

調査の対象と方法: 調査対象は、A大学心理学部で心理学の講義を受講する学生 117 名であった。分析対象者は、1 年生で、かつ、回答が有効であった 104 名 (男性 48 名, 女性 56 名, 平均年齢 18.31±0.75 (18-22) 歳) であった。新年度の講義が開講された 4 月の講義時間に、無記名による質問紙調査を集団で実施した。

調査項目: 対象者の基本属性と、次の項目について調査した。
加齢や高齢者、認知症に関する知識: 加齢や高齢者、および認知症に関する知識についての各 7 項目への回答を求めた。
高齢者イメージ: 先行研究で用いられた 2 種類の測定方法により調査した。保坂ら (1988) らが高齢者イメージの測定に用いた 50 の形容詞対を改訂した 12 対 (以下; SD 法イメージ, 7 件法), および、奥村ら (2002) で認知症高齢者のイメージ測定に用いた 9 項目 (以下; 行動特性イメージ, 6 件法) である。
大学生イメージ: 高齢者イメージの測定と同じ項目を用いて調査した。

高齢者などとのかわり: 近隣や近隣高齢者との交流, 看病や介護の経験, 高齢者との同居経験, 高齢者などとのかわり, 親や祖父母の態度への認識, 高齢者への感情, 高齢者への関心, 想定した高齢者の年齢などをたずねた。

結 果

イメージの因子構造: 高齢者イメージと大学生イメージを比較するため、それぞれのイメージごとに因子分析 (主因子法・バリマックス回転) を行った。

SD 法イメージ: 高齢者イメージでは、第 1 因子は暇そう、受動的、弱いといった項目に因子負荷量が高い「能動性」因子、第 2 因子はつめたい、愚かな、不幸なといった項目で構成される「統合性」因子、第 3 因子は憎らしい、遅い、厳しいといった項目から構成される「柔軟性」因子と考えられ、これまでの結果と類似していた。大学生では、第 1 因子は保守的、受動的、遅いといった項目に因子負荷量が高く、第 2 因子は

固い、憎らしい、つめたいといった項目で構成され、第 3 因子は弱い、愚かな、暇そうといった項目から構成されていた。大学生イメージの第 1 因子と高齢者イメージの第 1 因子では受動的、鈍い、保守的の 3 項目が共通しており、大学生イメージの第 1 因子は「能動性」因子とみなすことができる。大学生イメージの第 2 因子は、高齢者イメージの第 2 因子と冷たいと憎らしいの 2 項目が、高齢者イメージの第 3 因子と固いと厳しいの 2 項目が共通しているが、「柔軟性」因子と考えられる。大学生イメージの第 3 因子については、「強さ」因子と命名できる。

行動特性イメージ: 高齢者イメージでは、第 1 因子が穏やかである、周囲に配慮する、落ち着いているといった項目に因子負荷量が高く、これまでの研究と同じ「円熟性」因子である。第 2 因子は意欲的である、物事や周囲への関心が高い、感情表現が豊かであるといった項目から構成されており、これまでの研究と同じ「積極性」因子であった。大学生イメージでは、第 1 因子が穏やかである、落ち着いている、自立的であるといった項目からなる「円熟性」因子、第 2 因子が意欲的であると物事や周囲への関心が高いの 2 項目からなる「積極性」因子、第 3 因子が人と信頼関係を築くことができる感情表現が豊かであるの 2 項目からなる「関係性」因子であった。

高齢者イメージと大学生イメージの因子得点

高齢者イメージと大学生イメージの因子得点を比較するため、高齢者イメージと大学生イメージに対する回答を込みにして因子分析を行った。SD 法イメージは 3 因子 (能動性・統合性・柔軟性)、行動特性イメージは 2 因子 (円熟性・積極性) が抽出され、それぞれの因子得点を用いて分析した。

SD 法イメージ: 大学生の方が能動性得点 ($t(102)=12.57, p<.01$) と柔軟性得点 ($t(102)=3.27, p<.01$) が高く、高齢者の方が円熟性得点が高かった ($t(102)=4.62, p<.01$)。

行動特性イメージ: 高齢者の方が円熟性得点が高く ($t(101)=4.41, p<.01$)、大学生の方が積極性得点が高かった ($t(101)=8.45, p<.01$)。

考 察

SD 法イメージ・行動特性イメージでは、高齢者イメージと大学生イメージの因子構造が異なっていた。特に、行動特性イメージでは「関係性」因子が独立しており、この世代の人間関係の重要性が示されていると考えられる。さらに、SD 法イメージにおいても「強さ」因子が弱くに加え、おろかな、暇そう、不幸なといった項目からなっており、大学生の「強さ」の構成要素についても検討する必要がある。

引用文献

保坂久美子・袖井孝子 1988 社会老年学, 27, 22-33.
久世淳子 1997 情報社会科学論集, 1, 9-12.